

近くて遠かりし…岩手と方正

奥村 正雄

誘われて映画を観た。『いのちの山河』（大沢豊監督、「日本の青空Ⅱ」制作委員会）なる近作。岩手県の山あいの寒村・沢内村はかつて豪雪、多病、貧困にあえぎ続けた。新しい村づくりのため帰郷した深沢晟雄は多くの困難を乗り越え、1986年の老人と乳児の医療費無料化で、それまで全国で最悪だった乳児死亡率を、全国初の「死亡率ゼロ」へ導いた。その軌跡を追った映画である。

■涙こぼる

私は映画を見ながら、わけもなく涙を流した。話の展開を追う一方、この映画の舞台となった村と、そこにつながる人間群像との個人的因縁をあらためてかみしめていた。まず20代のころ、私の幼い歌ごころをとらえた民謡が「沢内三千石、およねの…」という「南部牛追い唄」だった。1969年5月、二番目の妹の祝言に、病いの父に代わって出席した私は、厚い壁に挑みながら新しい人世に船出する二人のために、万感の思いを込めてこの歌をうたった。

この山村との、二つ目の縁は1980年代である。当時、親交のあった趙喜晨氏（本誌10号で方正地区日本人公墓建立の経緯をつづられた、当時の黒竜江省外事弁公室幹部）から藤原長作さんの事績を聞き、ぜひ取材したいと思った。この時、藤原さんは方正にいと聞いたので連絡先を教えてもらい、電話を入れた。ところが藤原さんは中国政府から国家友誼賞をもらうことになって、北京へ行っておられた時だった。私は藤原さんの北京の宿舎へ電話し、お会いして話を伺いたい旨、話した。電話でのやりとりは、後日、藤原さんが方正か岩手へ帰った時に、あらためて取材させてもらうことになって受話器を置いた。その後、方正の友人から藤原さんが酒で体調を崩されている噂を聞いた。その間も方正県から政府の幹部たちがいろいろな目的で訪日するたび、彼らは何をおいてもまず岩手の寒村で病を養う藤原さんを表敬訪問し、それから東京の中央官庁など来日の目的地へ向かっていた。その後、藤原さんがもう会って話を聞ける状態ではなくなった上、息を引き取った藤原さんを追うように息子さんも世を去り、私はついに藤原さんにも身内の方にもお会いする機会を失ってしまった。

■分骨という重荷

その後、すでに冥界に去られた藤原さんと、いかにも現世的な話で関わることになったのは、この方正友好交流の会の前身の中心的存在だった故石井貫一さんが2002年に亡くなられた後である。中国への貢献で中国政府から国家友誼賞を受賞した石井さんは、

1994年、会のメンバーを伴って方正へ行き、帰路、ハルピン、北京で親しい人たちと会合を重ねるたび、「私の遺言」として口をついて出た言葉が「私は半分日本人、半分中国人。だから死後は骨を半分方正に埋めてもらう」だった。方正、ハルピンでの公式会合が終わった後、北京に回った石井さんは、公私にわたって深い付き合いのあった北京政府の高官の招待宴の席でもこの「遺言」を私に通訳させたのだった。

処理上の問題はまず、この「分骨」という日本流の発想を中国政府が認可してくれるかどうか、認可してもらえたら、それを公墓の中に入れさせてもらうのか、あるいは別の形を考えるか、である。私たちはまず方正政府の外事弁公室を通して、中央政府による認可を具申しももらった。この回答がなかなか得られない。「分骨とはいえ、中国で唯一公認の日本人公墓の園内に外国人のお骨を埋葬させるというのは、やはり簡単ではないのか」とイライラして待った。ところが、ある時、来日した方正政府の幹部にその確認を求めたところ、とっくに許可が下りていたことが分かったのだ。それならなぜ早く、待ちかねている私たちには知らせてくれなかったのか。伏せておいたほうがいい理由があったのか…しかし私たちには、それを詮索している余裕はなかった。分骨をどういう形で実現するか、が次に急がなければならないテーマだったからである。

■夢潰ゆ

たまたまこのころ、藤原長作さんの顕彰碑の建設が思うように進まないでいるという話が伝わってきた。

「建設費が250万円かかるが、岩手ではその半分、125万円しか集まらないというので困っているようだ」

というのである。ここで私は、藤原長作さんの顕彰碑、石井貫一さんの分骨の計画、さらにこれから将来、現われるであろう、方正のために献身する同胞のための、「方正に尽くした日本人合同顕彰碑」のようなものを建てるプランはどうか、と考えた。そしてこの話をしたためた手紙を、岩手の藤原さんの郷里で顕彰碑の実現に奔走しておられ、この土地の日中友好協会の会長でもある僧籍のRさんに送った。しかしこの返事はついに来なかった。

「お前が考えていることは、藤原先生の顕彰碑を建てる話と次元が違う」という理由だったかもしれない。しかしそれならそうと、私の提案が稚拙過ぎる、顕彰碑の話はそれとは別個に進んでいるから、話に乗らねる、など、ひとこと回答があつてしかるべきではないか、と私は憤慨した。

たしかにその後、中日友好園林に立派な「藤原長作記念碑」が建立された。映画『嗚呼満蒙開拓団』を撮った羽田澄子監督に方正県政府の担当者は「この碑は方正県政府が建てた」と説明したそうである。一将功成つて万骨枯る…か、石井さんの分骨は今もまだ東京吉祥寺の旧居に安置されたままだ。方正をめぐる、人目を引く話題の裏で、ひっそりと朽ち葉のように沈んでゆく歴史もある。

(おくむら・まさお、本会参与)